

PROGRAM

ピアノ 三重奏曲「ロマンティック」

マヌエル M・ボンセ

ピアノ 三重奏曲 第7番「大公」変ロ長調 作品97

ベートーベン

ピアノ 三重奏曲「ドゥムキー」ホ短調 作品90

ドボルザーク

インタビュアー 大沢富枝

四季のコンサート 夏

1986年6月26日(木) 6:30 PM

浜松市民会館 ホール

主催：浜松音楽友の会

●秋のコンサート 9月6日(土) PM 7:00
桐朋学園オーケストラ演奏会
●冬のコネサート 12月2日(火) PM 6:30
アルト・サクソフォーンと木管五重奏のタペ

る。現在桐朋学園大学講師。
ユリ子、堤剛(チエノック・バルバ氏)と共演を重ね
ラと協演、1985年連続二夜リサイタルなど、他、黒沼
1982年黒岩英臣指揮東京シスターズ・オーケストラ
1980年スナタ弦楽四重奏団とピアノ五重奏を共演。
モニーとの協演も多い。
チエノック・バルバ氏、朝比奈隆指揮大阪フィルハー
モニー及び1974年大阪文化祭受賞。延原武春指揮日本
1971年、78年の2回にわたり音楽クリティカルクラ
ークストラとの協演、室内楽など幅広い活動を行う。
業。以来、東京、大阪、神戸を中心にリサイタル、オ
・オーデイン・ジョーンに合格。1963年オーディションで卒
チエノック・バルバ氏入賞。ジュニアード音楽院内コンチェルト

1960年フルブライト音楽給費留学生として米国ジュ
リアード音楽院に入学。ロジャー・レヴィン氏に師
事。在学中カーネギー・リサイタルホールでのアマリ
カ合衆国ピアノ教育連盟推薦リサイタルに出演。テキ
サス州ヒューストン、ピアノ・レコーディング・スタジオ

優勝。

年日本音楽コンクールで第1位
桐朋学園高校音楽科3年の1958
内楽を斎藤秀雄氏に学ぶ。

基成氏、井口秋子氏に師事。室
三浦玲子氏、井口愛子氏、井口
アノの手ほどきを受け、のちに
東京に生まれる。4歳よりピ



関 晴子 (せき せいこ)

ピアノ・ソロ



チェロ 堤 剛
ヴァイオリン 黒沼ユリ子
ピアノ 関 晴子

室内楽のタペ

プロフィール

堤 剛(つつみ つよし)



幼時から父に手ほどきを受け、桐朋学園高校音楽科で斎藤秀雄氏に師事。1955年よりN響、日本フィル等日本の主要オーケストラと共演。

1961年、アメリカ・インディアナ大学に留学、ヤーノシュ・シュタルケル氏に師事。その後ミュンヘン国際コンクールで第2位、カザルス国際コンクールで第1位入賞を果す。

1965年にはインディアナ大学より「アーティスト・ディプロマ」を受け、1968年1月からはカナダ西オンタリオ大学教授に招かれる。

N響、新日本フィル、東京フィル等との世界演奏旅行、アメリカ交響楽団とのカーネギーホールでの共演他、武満徹、D・ステューブ等の初演曲も手がけている。1971年には彼のめざましい活動と成果に対して第2回鳥井音楽賞を贈られた。また1973年には、ベルギーの「ウジェーヌ・イザイ財団」より「ウジェーヌ・イザイ・メダル」が授与されている。

その他、芸術祭においての度重なる受賞、1980年、ベートーヴェン「チェロソナタ全集」によりレコードアカデミー賞を受賞する等の輝かしい経歴を持つ。1984年秋よりイリノイ大学の教授を務めている

黒 沼 ユリ子(くろぬま ゆりこ)



東京に生まれる。8歳よりヴァイオリンの手ほどきを受け、のちに鷺見三郎氏、イスナール女史、斎藤秀雄氏に師事。

桐朋学園高校音楽科1年の1956年音楽コンクールで第1位および特賞を受ける。

1956年チェコスロヴァキア政府招待留学生としてブラハ音楽アカデミーに入学、1962年栄誉賞つきで卒業。在学中の1960年、ブラハ音楽コンクールで第1位、1962年「ブラハの春」国際音楽祭でデビュー。以来、日本はもとより世界各地で活躍。

1970年には長年のチェコ音楽紹介の功績に対してチェコスロヴァキア政府より「演奏芸術家賞」を、1974年には「スメタナ・メダル」を受けた。1977年メキシコ政府より文化交流に貢献した外国人に与えられる最高の賞「トラテロルコの驚賞」を受ける。

1980年メキシコ市に黒沼ユリ子音楽院 Academia Yuriko Kuronuma A.C.(メキシコ政府公認・非営利法人)を開校し、メキシコの未来のヴァイオリニスト育成にも力を注いでいる。

ピアノ三重奏曲「ロマンティコ」

マヌエル M.ボンセ [1882~1948]

近代メキシコの代表的作曲家で、自身ピアニストであったことから、はじめはピアノ曲の作品が多かったが、スペインのギタリスト、アンドレス・セゴビアと知りあってから、セゴビアの熱烈な支持と激励により、次々とギターのための練習曲やプレリュードなどを作曲、ついにはギター協奏曲「スール(雨)」を発表した。この曲は今日のギタリストにとっては欠くことの出来ない重要なレパートリーのひとつに数えられている。なお、歌曲「エストレリタ(小さな星)」は、その美しいメロディーにより不朽の名作として、あらゆるジャンルの楽器のために編曲され、世界中で愛されている。

ピアノ・トリオ「ロマンティコ」は、1905~6年に、ボンセがヨーロッパに滞在中作曲を開始し、1912年にメキシコに帰国してから完成して、その年に初演された。ピアノは作曲家自身が演奏し、好評を得た。

4楽章から成り、ソナタ形式やスケルツォなど伝統的な形式を使って創られている。ボンセの特徴のひとつであるヨーロッパ音楽の伝統および作曲技法を知りぬいた、非常に洗練された作品でありながら、ヨーロッパからメキシコに移住されたメキシコ独特の雰囲気漂わせるロマンティシズムにあふれている。特に第2楽章は「アンダンテ・ロマンティコ」と題され、素朴で自然に流れるメロディーにあふれ、表面的に造られた音楽とはほど遠い心情のこもったボンセの作風をよく伝えている。

I Allegro energico アレグロ・エネルギコ

II Andante Romantico, Andante-Allegretto

アンダンテ・ロマンティコ、アンダンテ・アレグレット

III Scherzo, Vivace

スケルツォ、ヴィヴァーチェ

IV Allegro moderato

アレグロ・モデラート

解説 黒沼ユリ子

ピアノ三重奏曲 第7番「大公」変ロ長調 作品97

ベートーベン [1770~1827]

ベートーベンは9曲のピアノ三重奏曲を書いている。その最大の特徴は、3つの楽器が対等の立場で、それぞれの楽器の性格を十分に生かしたアンサンブルを展開していくという点にある。今夕演奏される第7番は、そのような各楽器のバランスが理想的な状態にある彼のピアノ三重奏曲の頂点に立つ傑作である。この作品は、1811年ベートーベンの41歳の時に書かれたものである。その頃、彼の耳の病気がかなりひどくなり、すでに日常会話にも不自由するようになっていた。そのことを証明するベートーベンの筆跡が何冊も残されているそうである。そのような時期に書かれた作品であるにもかかわらず、大変な名曲である。

全体の形式は、通常の古典的な4楽章構成のソナタと少し違っている。つまり、普通は第2楽章は緩徐楽章になり、第3楽章がスケルツォになるのであるが、「大公」ではこの2つの楽章が逆になっている。また、第3楽章と第4楽章が続いて演奏されるという点も古典派のソナタでは珍しいことである。第1楽章の第1テーマは、この作品の力強い、気高い、速達な性格をまさに一言で表現している。第2楽章は、ベートーベンのスケルツォ特有の躍動感にあふれた音楽である。第3楽章は、彼の晩年の作風を思わせる天国的な音楽で、主題と4つの変奏から成っている。第4楽章は、生き生きとした喜びに満ちた終曲である。

なお、「大公」という曲名は、この作品が旧オーストリア帝国のルドルフ大公(1788~1832)に捧げられたものであることを示している。この大公は、ベートーベンの良き保護者であり、彼に年金を支給した人でもあり、ベートーベンはこの大公にピアノを教えたり、多くの作品を献呈している。

解説 須貝静直

ピアノ三重奏曲「ドゥムキー」ホ短調 作品90

ドボルザーク [1841~1904]

ピアノ三重奏曲は古典主義の時代に生まれた。しかし、ロマン主義の作曲家がピアノ三重奏曲を書くときには、その古典的な伝統を個性的なやり方で崩していく傾向が見られる。19世紀後半に活躍したドボルザークの「ドゥムキー」も、楽器編成がバイオリン、チェロ、ピアノであるという点を除けば、形式的にも模式的にも古典的な伝統から非常にかけ離れたものとなっている。そこには新鮮な工夫や大胆な思いつきがあふれている。

全体は6楽章で構成されている。各楽章とも気分がひんぱんに変化し、気まぐれな印象を与えることが多い。形式的には単純な三部形式が用いられており、論理的な性格のソナタ形式はどこにも見られない。また、第5楽章を除いては、テンポの速い楽章と遅い楽章の区別もない。つまり、個々の楽章の中で速い部分と遅い部分が交代してあらわれている。さらに、遅い部分は哀愁的な表情に満ち、速い部分は情熱的な気分にあふれていることが多い。このような楽曲構成は、ドゥムカというスラブ民族の哀歌の特徴なのである。このドゥムカの複数名詞がドゥムキーであり、それがこのピアノ三重奏曲の曲名となっているのである。スラブ的な特徴は、以上のような形式面だけでなく、リズム、メロディー、ハーモニー、さらにはビチカートなどの技法の使い方にもあらわれている。作曲されたのは1891年2月プラハにおいてである。

解説 須貝静直